

# The Standard



Volume 4

Aino Aalto's  
Riihitie plant pot and  
four other highlights from Artek

**artek**



「リーヒティエ プラント ポット」は、デザインだけでなく、日々の暮らしや人生の営みにおいても、細部やディテールを大切にしたアルヴァ・アアルトとアイノ・アアルト夫妻の想いを現代へと伝える存在です。

# The Riihitie Plant Pot by Aino Aalto

リーヒティエ プラント ポット

## 「自然とともに暮らす」 80年の時を経て受け継がれる アアルト夫妻の想い

1934年、アルヴァ・アアルトとアイノ・アアルトは、ヘルシンキ郊外の海辺の町、ムンッキニエミにあるリーヒティエ通りに小さな土地を購入しました。ムンッキニエミは、今でこそトラムに乗れば都心からほど近い地域ですが、当時は延々と田舎の風景が続くばかりでした。しかし、自然や自然素材を愛したアアルト夫妻は、あえてこの場所に自宅兼アトリエを構えることに決めたのです。自邸が完成した1936年から1990年代まで、アアルト夫妻のデザイン哲学が詰まった最愛の自邸に、アアルトの家族は暮らしていました。現在、ミュージアムになったアアルト自邸(※1)では、窓や平らな屋根など、極めてシンプルな外装から、アアルト夫妻の機能主義へのこだわりを垣間見ることができます。アルヴァ・アアルトとアイノ・アアルトがともにこだわりを持っていたのは、日常生活における機能性と実用性、そしてデザインが違和感なく調和することでした。その一方で、ふんだんに使用されている木材やスレート、暖炉や壁のレンガなどからは、自然素材の温かさや心地よさを感じることができます。

リーヒティエ通りの裏、閑静な住宅街に建てられたアアルト自邸の南向きのテラスには、アイノ・アアルト

がデザインした大きな白い植木鉢が2つ、今も静かに佇んでいます。この植木鉢は、1937年のパリ万国博覧会(※2)で展示され注目を集めたものの、当時は製品化にまで至りませんでした。フィンランドが独立100周年を迎える2017年、80年の時を経て、当時のデザインはそのままに「リーヒティエ プラント ポット」として素材を変えて製品化されました。リーヒティエプラントポットは、アアルトの主な建築に用いられているタイルから着想を得たセラミック素材を選び、室内用として3種類のサイズを、ホワイトとブルーの2色で展開します。その清々しいカラーは、フィンランドのムーラツァロにあるアアルトの夏の家、「実験住宅」で使用されているセラミック製のタイルの色がもとになっています。

自然とともに生き、自然とともに暮らし、その中からデザインを紡いだアルヴァ・アアルトとアイノ・アアルト。その想いは、優しく有機的なカーブをハンドメイドにより表現した、リーヒティエプラントポットのなかに脈々と息づいています。

# Aino Aalto

アイノ・アアルト

## アルテックの初代アートディレクター 20世紀のデザイン史に残る 数々の名作を生み出した現代的な女性

アイノ・アアルトは、1924年より建築家としてアルヴァ・アアルトの建築事務所に勤め、それから長い年月、彼とともに同事務所を率いながら、アルテックの創業と発展に主導的な役割を果たしました。彼らの関わった多くの建築やプロダクトは、歴史の流れの中で、アルヴァ・アアルトの作品として名を成しましたが、アイノが1949年に早すぎる死を迎えるまで、アルヴァ・アアルトとアイノ・アアルトはあくまで対等な立場として共同でプロジェクトに携わっていました。

1894年、旧姓アイノ・マンデルリンは、ヘルシンキで生まれました。ストライプのゆったりとしたシャツを纏い、晴れやかな笑顔を見せる1930年代のアイノの写真は、彼女がまっすぐな明るさと強い意志を持った現代的な女性であったことを物語っています。アイノはヘルシンキ工科大学で建築を学び、1920年に卒業した後、当時の建築界の名門オイヴァ・カッリオの事務所に勤めます。その4年後、アイノはアルヴァ・アアルトと結婚、彼とともにアアルト事務所で、パイミオサナトリウム(1928-33年)、サヴォイレストラム(1937年)、マイレア邸(1939年)や、アルテックストア、米国MITの学生寮であるBaker Houseなど、数々のプロジェクトに携わり、内装デザインを担当しました。パイミオサナトリウムのためにデザインされた「606 サイドテーブル」(※3)などの家具や美しいテキスタイルの多くが、これ

らのプロジェクトの中から生まれました。その一方で、彼女自身のプロジェクトとして、展覧会のインсталレーションや、ガラス製品のデザインなどを手掛け、彼女のガラス製品は、現代においても世界中で親しまれています。

1935年、夫アルヴァ・アアルトと、同じ志を抱くマイレ・グリクセン、ニルス＝グスタフ・ハールとともにアルテックを創業し、アイノ・アアルトはアルテックの初代アートディレクターに、1941年からは社長に就任します。家具の構造や材質、グラフィックまで、アルテックにまつわるすべてのデザインは、彼女の管轄のもと一つの価値観で統一され、より強く、美しく、研ぎ澄まされていきます。その価値観は、時を越えて受け継がれ、アルテックというブランドに貫かれる一本の太い幹として育ち、今もなお揺らぐことはありません。アルテックの基礎を築いたアイノ・アアルトは、アルヴァ・アアルトと同様に、稀代の優れた建築家でありデザイナーでした。そしてモダニズムの思想を広め、世界を変えたいという強い想いを持ち続けた先鋭的な思想家でもあったのです。





アイノ・アアルトは、シンプルで機能的なデザインを自身のプロジェクトの中で次々に具現化することにより、現在のフィンランドデザインの確立に大きな役割を果たしました。

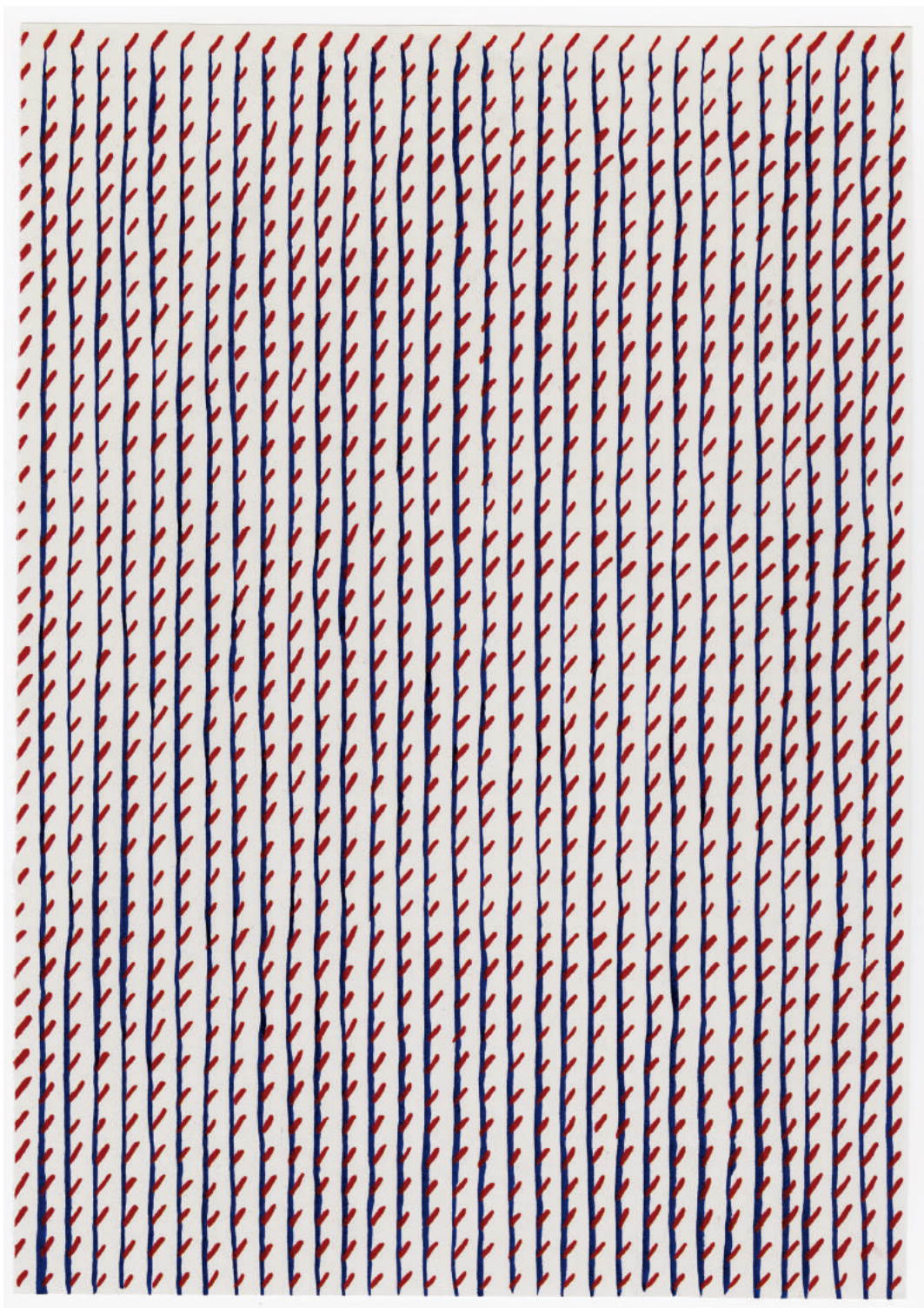


「606 サイドテーブル」は当初、アイノ・アアルトが、「パイミオ サナトリウム」のプロジェクトのために、靴を履くときちょっと腰掛けるスツールとしてデザインしたものでした。



トゥルク近郊に建てられたパイミオサナトリウム(1928-33年)のために作られた製品は、家具やインテリアとしての美しさだけでなく、療養している患者が身体と心を癒せるよう考えられたものでした。





フィンランド語で「行」や「列」を意味する「リヴィ」は、規則的にどこまでも続く平行線を表現しながらも、手描きならではの心地よい揺らぎを感じることができます。



# Rivi by Ronan and Erwan Bouroullec

リヴィ

## アルテックの価値観を受け継ぐ 手描きのテキスタイルにみる 不完全さゆえの揺らぎと美しさ

才能あふれるデザイナー、ロナン・ブルレックとエルワン・ブルレックは、2013年、初めてアルテックの製品開発に携わりました。2年間の開発期間を経て、グラフィカルかつ印象的なテーブルと棚のシリーズとして「カアリ」を発表。スチール製のシンプルな部品をそれぞれの家具に応用した「カアリ」は、アルヴァ・アアルトが考案した、部品とシステムの考え方を受け継ぐシリーズです。ロナン・ブルレックはインダストリアルデザインを、エルワン・ブルレックはアートを学び、1999年に兄弟でロナン&エルワン・ブルレックとして活動し始めて以来、それぞれの異なる経歴を活かした独自の視点から、洗練されながらも、どこかに人の手による温かみを残した製品を発表し続けています。

2017年、ロナン&エルワン・ブルレックは、彼らにとって初めてのテキスタイルとなる「リヴィ」を発表しました。フィンランド語でリヴィは「行」や「列」を意味し、限りなく続く平行線をハンドドローイング(※4)で表現しています。規則性の中にラインの揺らぎを感じられるリヴィのドローイングの美しさは、手描きだからこそ表現できる面白さや個性があります。その中には、自然が作り出す不完全さに美や個性を見出すことを大切に

してきたアルテックの価値観が脈々と受け継がれているのです。アルヴァ・アアルトとその妻アイノ・アアルトは、日常生活を美しく彩るテキスタイルを、インテリアにとって欠かすことのできない重要な要素と考えていました。人々の暮らしをより良くすることを目指してアルテックが創業された1935年から、テキスタイルは主要なアイテムの一つとしてマニフェストに挙げられていました。マニフェストが示す通り、創業当時から、アルテックはアイノ・アアルトの審美眼により選ばれた「ゼブラ」に代表される人気の高いテキスタイルを世に送り出してきたのです。

リヴィは、コットン、キャンバスコットン、コーテッドコットンの3種類の素材と、それぞれ4色のバリエーションがあります。手入れがし易いコーテッドコットンはテーブルクロス(※5)に、その他の素材はカーテンやベッドリネンのDIYなど、幅広い用途に使うことができます。クッション、ポーチ、トートバッグ、トレイなどのアイテムとしても展開し、日々の暮らしを豊かに楽しく彩るリヴィは、アルテックのテキスタイルへの想いを、現代からさらに未来へと伝えていきます。



3種類の素材と、それぞれ4色のバリエーションを備え、さらに幅広いアイテムとしても展開するリヴィは、日々の暮らしに自然に取り入れることができます。





手描きでデザインを起こすプロセスを大切にしているロナン&エルワン・ブルレックならではの独自性は、アルテックが受け継いできたテキスタイルへの想いととも「リヴィ」の中に息づいています。



フィンランドの独立100周年を祝う特別なカラーとして、脚部にはラッカー仕上げのストーンホワイト、天板や座面にはリノリウム仕上げの淡い4つのカラーが選ばれました。



# Happy One Hundred

フィンランド独立100周年

## アルヴァ・アアルトのデザインに 新たな魅力を与える フィンランド100 モデル

2017年、フィンランド(※6)は民主主義の独立国として100周年を迎えました。建国からまだ日の浅いフィンランドにとって、フィンランドデザインが国際的に広く認知され大きな成功を収めたという事実は、国と国民のアイデンティティの確立につながるとともに、国内のデザイン文化を更なる発展へと導きました。アルテックは、フィンランドのデザイン、ライフスタイル、文化の発展において大きな役割を担い、今もなお影響を与え続けています。フィンランドの独立100周年を祝うため、アルテックは、これからの未来を担うデザイナー、ロナン&エルワン・ブルレックやダニエル・リーバッケンによる新しい製品を発表しただけでなく、アルテックの基礎を築きあげたアルヴァ・アアルトの「L-レッグ」を用いたアイテムにも新たなバリエーション、「フィンランド100 モデル」を発表しました。

フィンランド100 モデルは、脚部にはラッカー仕上げのストーンホワイトのカラー、座面や天板にはリノリウム(※7)仕上げの淡いブルー、ライトグレー、ペブル、オリーブの4色を施しています。フィンランドの豊かでありながらも静謐な景観を彷彿とさせる色彩は、空間を印象的に彩るだけでなく、アアルトのデザインに新た

な魅力を与え、従来の機能的な美しさを際立たせています。

1920年代後半、アアルトは家具職人のオット・コルホネンとともに、曲げ木の技術開発に着手しました。その結果、堅固な無垢材を90度に曲げることに成功し、L-レッグが完成しました。1933年に特許を取得したL-レッグは、スタンダード部品として様々な製品に応用され、アルテックの家具デザインの基礎を築きました。しかし、アアルトは、L-レッグなどの部品をスタンダード化する一方で、家具デザインは多様化すべきとの考えも持っていたため、アルテックでは、現代の生活に合わせてスツールやテーブルなどの高さを調節したり、新しい色味を施したり、さまざまな形でのコラボレーションやカスタマイズなどを行い、家具デザインの多様性と自由さを表現してきました。それでもなお、核となるアルヴァ・アアルトによるデザインの強さと美しさは変わることがありません。



「フィンランド100 モデル」の穏やかで印象的なカラーは、アルヴァ・アアルトのデザインに新たな魅力を与え、従来の機能的な美しさを際立たせています。





# The Domus Chair Finland100 Edition

ドムス チェア フィンランド100 モデル

## 快適な座り心地はそのままに フィンランド独立100周年を祝う 柔らかく味わい深いトナカイ革

「チェアはただ座るものではない。  
インテリア全ての鍵である」  
イルマリ・タピオヴァーラ(1914-1999)

「ドムス チェア」は、1946年、フィンランドの巨匠イルマリ・タピオヴァーラ(※8)により、学生寮ドムスアカデミカのためにデザインされました。当初、学生たちが使う椅子として開発されたため、長時間座っても疲れにくく、また、部屋での勉強用、学生寮の食堂や講堂、応接室などさまざまなシーンに対応できる多目的性を備えています。特徴的な小さいアームレストは、肘置きとしての役割をきちんと果たしながら、テーブルに椅子を引き寄せやすく考慮され、軽量でスタッキングが可能といった機能面も優れています。戦後まもないフィンランドで、産業はまだ乏しかったものの、天然資源であるバーチ材を切り出した合板の生産は盛んに行われていました。タピオヴァーラは座面を積層合板にする一方で、椅子全体の重さを支えるフレームには強固な無垢材を使用するなど、目的に応じて材種を使い分けています。アルヴァ・アアルトが二次元の曲げ木の技

術に取り組んだのに対し、タピオヴァーラは、より身体にフィットする三次元の成形技術を開発したことで快適な座り心地を実現しました。チャーミングな佇まいと快適な座り心地が魅力のドムスチェアは、70年の時を越え、今なお世界中で愛されています。

アルテックは、フィンランド独立100周年を迎える2017年、深い青色のトナカイ革を座面に張った「ドムス チェア フィンランド100 モデル」を数量限定で発表しました。フレームとバックレストはハニーステイン仕上げのフィンランド産バーチ材を用い、座面には高品質のトナカイ革がフィンランド中西部の小さな工場で手作業により張られています。とても薄く、柔らかいトナカイ革は、アニリン染料で深い青色に染められ、加工は軽いワックス仕上のみの最小限に留めています。そのため、傷跡や皮膚の質感など、自然の生命の美しさがそのまま残り、時間の経過とともにさらに柔らかく、味わいを増していきます。また、使われているネジは、ドムスチェアがデザインされた当時のシンプルな形を真鍮で再現しています。





「ドムス チェア フィンランド100 モデル」は、生命の美しさをそのまま残した柔らかなトナカイ革が座面に張られ、その革は、時間の経過とともに、さらに柔らかく、青色は深さを増していきます。

## Notes

### 1. アアルト自邸

アアルト自邸は、ヘルシンキ郊外の海辺の町、ムンッキニエミにあるリーヒティエ通りにあります。1934年にその地に土地を購入したアルヴァ・アアルトとアイノ・アアルトは、彼らのデザイン哲学を実現し、お気に入りのものを集める自宅兼アトリエとしてアアルト自邸を建てました。自邸が完成した1936年から1990年代まで、アアルトの家族や子孫が実際に暮らしていましたが、現在はミュージアムとなり、事前に予約をすれば、アアルト夫妻最愛の自邸の中や庭などを見て回ることができます。アアルト自邸の細部からは、アアルト夫妻の機能主義へのこだわりを垣間見ることができ一方で、ふんだんに使用されている木材やスレート、暖炉や壁のレンガなどからは、自然素材の温かさや心地よさを感じることができます。



### 2. パリ万国博覧会(1937)

1937年、パリで、アートとテクノロジーを題材に開催された万国博覧会において、アルヴァ・アアルトとアイノ・アアルトは、会場内のフィンランドパビリオンを手掛けることになりました。フィンランドの伝統的な素材である木材を主に用い、天井はスチールの枠組みを使いダイナミックに構成され、中庭には、アイノ・アアルトがしつらえた花や木々が植えられました。これは、アアルト夫妻にとってフィンランド国外での最初の建築であるとともに、彼らの国際的な注目と評価を高めるものになりました。



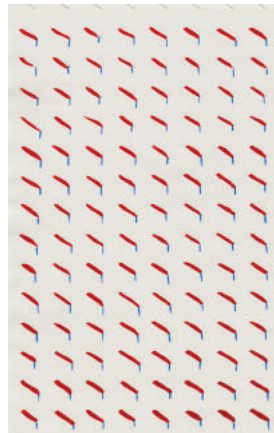
### 3. 606サイドテーブル

1933年に建設されたフィンランド南西部に位置する「パイミオ サナトリウム」は、建築家アルヴァ・アアルトの人間的なモダニズムを表現した名作として世界的な注目を集めました。アルヴァ・アアルトとアイノ・アアルトは、療養する結核患者が心地よく快適な暮らしを送ることができることようと、使いやすい機能的な家具を考案し、心が明るくなるようなインテリアをデザインしました。「606サイドテーブル」は、このプロジェクトから生まれた一連の家具の一つで、もともとは靴を着脱する際に腰掛けるスツールとしてデザインされましたデザインされました。



### 4. ハンドドローイング

ロナン&エルワン・ブルレックは手描きでデザインを起こす過程をととても大切にしています。アルテックが、ロナン&エルワン・ブルレックとともに新しいテキスタイル「リヴィ」の製作に取り掛かった際も、まず彼らは手描きでスケッチを始めました。リヴィは、手描きならではの不規則な短い線の集合体が行や列を成し、限りなく続く平行線として表現されています。2013年にJRP Ringierより発刊された864ページにわたるロナン&エルワン・ブルレックの書籍「Drawing」には、2005年から2012年の間のロナン&エルワン・ブルレックによる850ものハンドドローイングが収められています。



### 5. テーブルクロス

「リヴィ」は、コットン、キャンバスコットン、コーテッドコットンの3種類の素材で展開しています。従来のアルテックのテキスタイルが色彩と温かさを暮らしに添えてきたのと同様に、リヴィもまた、水をはじく機能性抜群のコーテッドコットンのテーブルクロスに、トレーやランチョンマットをコーディネートすることで、日々の食卓を楽しく、カラフルに彩ります。クッション、ポーチ、トートバッグ、など生地を使った既製のアイテムも展開し、用途に合わせて楽しむことができます。



## 6. フィンランド

フィンランドは、338,440平方キロメートル、ヨーロッパで5番目に広い国土を有していますが、国土の3分の2が森林に覆われ、人口は540万人ほどです。フィンランドの特徴といえば、実に187,888もの湖が存在するという、多くのヘビーメタルファンがいること、そしてさらに驚くべきことは、脅威的なコーヒーの消費量で、1人あたり1年に12キログラムのコーヒーを消費しているといわれています。



## 7. リノリウム

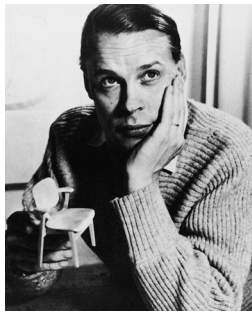
リノリウムは、1855年にイギリス人フレデリック・ウォルトンによって発明されました。それから160年以上を経た現代においても、変わることなく、リノリウムは環境にやさしく優れた仕上げ材の一つです。天然素材から作られているため、時間の経過に伴い自然に分解されます。家具の仕上げの際には、リノリウムのベースに含浸紙を使うのが一般的です。亜麻と呼ばれる植物の種から取る亜麻仁油、石灰岩、ロジン、木粉、コルク粉、ジュート、天然色素などを混

ぜて、シート状にします。光沢を抑えたマットな質感だけでなく、静電気を抑え、指紋の跡もつきにくい、リノリウムは日常生活での使用にとても適した仕上げ材です。



## 8. イルマリ・タピオヴァーラ

イルマリ・タピオヴァーラ(1914-1999)は、フィンランドデザインを代表する建築家でありデザイナーです。アルヴァ・アアルトの影響を強く受け、モダニズムの概念を追求し、すべての人々の暮らしが豊かになるようにと考えていました。ヘルシンキでインテリアの設計とデザインについて学んだ後、パリに赴くとル・コルビュジエの事務所に務め、その後、フィンランドの大手家具メーカー、ASKO社のアートディレクターになりました。第二次世界大戦後は、彼の名を一躍、世界へと広めたヘルシンキの学生寮「ドムス アカデミカ」のプロジェクトとともに発表された「ドムス チェア」、1956年の伝統的なスポークチェアのデザインに優れた耐久性を備えた「マドモアゼル チェア」、1960年にはモジュラーシステムによる「キキ」シリーズを発表。イルマリ・タピオヴァーラを代表するこれらの家具は2010年以降、アルテックから製造、販売されています。



# Colophon

東京オフィス  
〒151-0051  
東京都渋谷区  
東京都渋谷区千駄ヶ谷3-59-4  
クレストコート原宿101  
info.jp@artek.fi

Facebook@Artek Japan  
Twitter@Artek Japan

ヘルシンキ - 本社  
Artek oy ab  
Lönnrotinkatu 7  
00120 Helsinki  
Finland

本リーフレットに掲載されている商品は各販売店でご購入頂けます。  
(入荷状況は店舗により異なります)  
詳しくはWeb Siteをご覧ください。  
<http://www.artek.fi/contacts/di/Japan>

Art Direction: Something Fantastic  
Texts: Caroline Roux  
Copyediting: Jenna Krumminga  
Translation and Edit: Artek Japan

## Image Credits

p. 2, 10-12, 14-15, 17:  
photo Zara Pfeifer, styling  
Connie Hüscher  
p. 5: Alvar Aalto Estate/Alvar  
Aalto Museum  
p. 6-7: Artek  
p. 8: Studio Bouroullec

## Image Credits Notes

1. Maija Holma/Alvar Aalto  
Museum  
2-3. Artek  
4. Studio Bouroullec  
5-6. Zara Pfeifer  
7. Schaeppman & Habets  
8. Artek

6/2017



アルテックは1935年、アルヴァ・アアルト、アイノ・アアルト、マイレ・グリクセン、ニルス=グスタフ・ハールの4人の若者により「家具を販売するだけではなく、展示会や啓蒙活動によってモダニズム文化を促進すること」を目的に、ヘルシンキで設立されました。今日、アルテックのコレクションは、フィンランドの巨匠たち、そしてグローバルに活躍する建築家やデザイナーによる家具や照明器具、ホームアクセサリーが揃っています。才気あふれるクリエイターの独創的なビジョンを、斬新なテクノロジーを使って明快な表現へとまとめあげることこそ、アルテックのものづくりの真髄なのです。創業者の精神を受け継ぎ、アルテックは今日でもデザイン、アート、建築の交点に立ち、未来への道を切り開き続けています。

**artek.fi**